
旅に出たい男の日常

でやーこん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅に出たい男の日常

【Nコード】

N1404BA

【作者名】

でやーこん

【あらすじ】

目的のための手段が目的へと入れ替わる。そんなドンマイな男にスポットを当てた話です。

なんか見たことある人の家族になってますが、私個人の”欲望！”とその人が住んでる場所に都合いいかも、と思った結果です。

ちよこつと説明、それから日常へ。（前書き）

張り切りすぎた気がする。文字数キープできませんね、これは。

ちよこつと説明、それから日常へ。

『ポケットモンスター』、縮めて『ポケモン』。

この世界のほとんどの人々が何らかの関わりを持っていると言っても過言ではないほど、人間と馴染みの深い不思議な生きものたち。

ペットというより、むしろ友達、相棒、仲間といった見方をする者が多い。幼い頃からずっと共に育つこともよくあることだ。ポケモンの方も同じような考え方らしいので、互いの種族の関係ははるか昔から良好。そして現在へと続いている。

ところで、そのポケモンたちを戦わせ、互いの力を競う競技がある。『ポケモンバトル』という競技だ。もちろん、強制的に戦わせている訳ではなく、ポケモンを育てる『トレーナー』とポケモンとの相互理解を深め合いながら極めていくものである。

競技、と分類されるのであれば、大きな組織により厳密なる法をしかねばならないことは必須条件だ。してはならないことをしでかせば罰を、誇るべき者には栄光を。そして、栄光をつかむことのできるステージを用意しなければならない。

それにより完成したのが『ポケモンリーグ』という場所、そしてシステムであった。

リーグを創った『ポケモン協会』が敷いたルール、それは――

？ポケットモンスター（以下ポケモン）は、十歳に達していなければ戦わせることはできない。

？ポケモンを悪事に使うことは許されない。

？人のポケモンを奪ってはならない。

？交換は、その手持ちポケモン含め、互いの合意あって初めて行うものとする。

？バトルによる勝者への賞金を賭けて戦った場合、金額は敗者の持っている金額の10分の1とする。勿論のこと、ポケモンを賭けてはならない。

？バトル形式は、予め互いが確認し合い、決めた形式に乗っ取ることが互いに可能ならば始めること。

？バトル形式は基本、『シングルバトル・ダブルバトル・トリプルバトル・タッグバトル』の四つのみであるが、互いが理解できるのならば、好きなように形式を決めても構わない。

？リーグについて——リーグは、予選と本戦がある。本戦については、シード権が存在している。シード権の獲得には、リーグが行われる地方のジムバッジ八つ全てを手に入れなければならない。本戦優勝者は、その後四天王、さらに現チャンピオンと戦い、その全てに勝利して初めてリーグ優勝とする。

この八つである。

これはあくまで大まかに説明されたものであり、本来は詳しく書かれている本もあるのだが、余りにも面倒な言い回しをしているものも多々あるのだ。

例えば、幼稚園児など明らかに十歳に達していない場合でも、保護者又はきちんとした資格持ちの指導者が監督すればその限りではない。といったところだろうか。判りやすく言うなら——そう、職場体験学習や、一日警察官のようなもの。

大人ならともかく、十歳児に覚えろというところなので八つに分け、簡単に記しているものが多くの人々の記憶にあるルールとなっている。

話を戻すが、ルールというものは大事。なので協会は各地方に『トレーナーズ・スクール』を設置し、ポケモンについての教育を施すことを義務付けた。未来有る子供たちは、そこで学び、そして未知

の世界へ踏み出していくのだ。

イツシュ地方、ライモンシティ・ジムの裏手にある一軒家に住む男コウヤも、そのような夢を抱き、期待に胸を膨らませていたものだった。

だが、今ではその勢いもすっかりと抜け落ち——というか初めからそんな気はなかったのではないか、と思われてしまうほどに、あっさりと『デリバリー・サービス』の仕事をはじめしまったのである。

当時はバトルの腕も良かった故に、姉弟共に才があると言われ将来を期待されていたのだが、肝心の弟の方——つまりコウヤには、ある願いがあった。

それは、『もつと、いろんなものをみてみたい』というものである。いわゆる、旅にでたいというものだ。幼い頃からひよんなことでそんな願いを抱き始めていたコウヤは、旅行の話が上がると嬉々として賛成したものだ。

ともかく、若干15歳のがきんちよが始めた店は、それはもう繁盛なんて遠いどころか、本業の人に申し訳がないほどの粗末なものであった。

なんて言っ たって15歳。移動手段と言えば精々自転車を飛ばすく

らいである。速度の速い『マッハじてんしゃ』に乗っていたとしても運ぶ距離、速さ、物にも限度というものがついてまわる。

新聞配達バイトが動ける範囲内でしか動けない。これにはコウヤは焦った。何しろ、見るといつてもシティの一区画程度しか……というのは、己の目的に全く、これっぽっちも近づけないということが分かりきっていたからだ。

だが、そこで諦めてしまったら男が廃るというもの。コウヤは早速本業の配達業者に頼み込み、そこで手伝いをさせてもらう中で配達のコウハウを17になるまで教わった。

その間に免許を取得し、18でバイクを購入して、再びデリバリー・サービスを開業し始める。

運搬可能距離が圧倒的に伸び、評判も良かったので、よほど遠い距離でなければ、各シティから噂を口コミで知った人々から依頼が来るようになった。

『依頼とあれば“どんな事情”があろうがどこにでも』を売り言葉にしているために汚い仕事も少なくはなかったが、その分売上も伸びるので、必然的に繁盛していたのである。

そんな中、ある依頼者が協会の一員で、何故かそのお眼鏡に敵い『

協会専属の運び屋』になることを勧められる。コウヤも最初は渋ってはいたのだが、表向きは普通のデリバリーサービス店として機能してもらって構わない。さらに報酬もそれなりに高い、ということを知ったコウヤは、これまたあっさり承諾したのであった。姉のカミツレ曰く——いつから目的（旅）のための手段（旅費集め）が目的へと変わったのやら——このご時世、よくあることなので放っておいてあげて。

一つ間違いを正しておこう、守銭奴に成り代わってしまったコウヤだが、ちゃんと本来の目的は忘れてはいない。

実際、仕事のおかげで資金がたんまりとあるので、時々休みを取っては様々なシティ、地方へと足を伸ばしている。

現地の人々とのコミュニケーションはよく取る方なので、知り合いも増えたし、今では友人と呼べるものもいる。

さて、マイライフを思う存分に満喫できるようになったコウヤではあるが、彼には気に食わないことが最近起きた。

あるとき協会の依頼をこなしたあとで聞いたことなのだが、どうも『プラズマ団』とかいう組織があちこちの人々のポケモンを『開放』という名目で奪っている。というものであった。

これには流石に穏やかでは居られない。ただでさえ人とポケモンとの関係を大切に思うジムリーダーがそうなのだ。

ライモンシティ・ジムリーダーであるカミツレもその例外ではない。無論、コウヤも。

ただ、ほかの者にはない思いがある。それは、悪事を働く無法者。それらがプラズマと名乗っていることにある。

プラズマ——自由に運動する正負の荷電粒子がどうのこうのがそれだ。つまるところ、“でんき”に関係している単語である。

でんきタイプのエキスパートにとっては、その事実を流せていいような問題ではない。なんかもう本能的に嫌なのだ。同じくでんきタイプを扱っているコウヤもその例外ではない。

カミツレはプラズマ団に関する悪事が新聞に取り上げられている文面を見ているも、表情には出さないのだが、コウヤはその不快感を思いつきり表情に出す。そのおかげでただでさえ鋭い目付きがさらに輪をかけて鋭くなり、周囲の人間から「目が怖い」と指摘される要因のひとつとなってしまうたのであった。

「コウヤ、目、また悪くなってるわよ」

いつもの日課のようなものになってしまっている新聞とのにらめっこ中に掛けられた声は、若干の呆れの色を帯びていた。

「仕方ないだろ。ていうかなんだ、悪いって。僕の視力は両目共2.0あるっての」

「比喩的なものよ。“悪い”の定義っていろいろあるでしょ。例えばばほら、目付きとか」

なんだそれ、つまりなんだ、僕の目付きが悪いとか言いたいのかそうなのかそうなんだろうな——こんちくしょう。

「……ふん、そっちこそ、表情に出してないところとかますますアンドロイドっぽさに磨きがかかってるぞ。そんなんでモデル仕事務まるのかよ。笑って、とか言われたときに口ボ顔じゃ笑えるぞ、こっちが」

売り言葉に買い言葉。大人げない？そうだろう、そうだろうが——そんなもの関係ない。大いに買ってやるし、売ってやる。

先程まで、コーヒーに入れたミルクをかき混ぜていたために伏せていた顔を上げてくるカミツレ。その表情はあいも変わらず無表情ではあるが、こちらには判る。……あれは少なからず気に障った感じだ。

「は、何を言い出すかと思えばそんなこと。いいこと？ 芸能人という人種はオン・オフの切り替えがハッキリとできるものなの。やるときはやる、休むときは休む。処世術の基本よ。貴方、普段のオフの時にしか顔を合わせないし、TVも見ないものね。オンの私を見ていないから、そんなことが言えるのよ」

「む……」

言っておくが、僕は決して負けたわけではない。負けたわけではないが——そう言われると、ぐうの音も出てこない自分がいる。

カミツレの言うとおり、確かに、自分はTVというものをあまり見ない。日々のニュースは毎朝見る新聞で事足りると思っているし、旅費集めのために日夜奔走している身としては、バラエティやらドラマやらをゆつくりと見られる時間もつくる気も起きないからだ。

言い終わったカミツレが、僕が何も言い出さないことをいいことに勝ち誇り、なにやらしてやったりといった顔をしている。——と言っても、無表情から読み取ったことだが。

くやしい、非常に悔しいが、何も言えないことも事実なので、近くにあったガムシロップを紅茶に入れ、スプーンでかき混ぜる。――

受け入れがたいことだが、僕ことコウヤはカミツレに勝ったためしがない。それはもう、色んなことで、だ。

幼い頃はバトルの腕では五角であつたのだが、途中協道にそれた自分とカミツレの差は歴然で、今では敵わない。全く。

ならば言葉で、と意気込み、事あるごとにちよっかいを出してはいらるものの、今のようにズバツと切り返されてしまふのであつた。

故に、敵わない。飲み物をカミツレとは違う紅茶にしているのも、せめてもの悪あがきのつもりなのかもしれない。

「あら、電話ね」

私が出るわ。と席を立つカミツレ。

この家にかかってくる電話とえば、どちらかというジム関係のものが多い。なのでダイニングテーブルを囲む位置もカミツレが一

番受話器に近い位置取りをしている。

そもそも、僕がやっているデリバリー・サービスへの電話は基本、僕のポケギアにかかってくるようにしてあるので間違えようもないのだが。

今回の電話はカミツレ宛のようで、相手と事務的な会話を終えて、席に戻る。……ふむ、なにやら楽しそうだ。

「どうした？久しぶりに挑戦者が来たとかか？」

「その通りよ。なんでも、若い子が二人ほど私に挑戦したいって申請があったらしいの。まあ、久しいといってもブランクなんてないし、そもそも負けるつもりもないのだけれど」

そう言つて、ずず、と残りのコーヒーを飲み干すと、カミツレは立ち上がり、既にフーズを食べ終えてのんびりとしていたエモンガをボールに戻した。

「どこへ？」

聞いてみるが、その答えは分かっている。

「ジムへ。少し、体を温めてくるわ。今回の子達が、私をクラクラ

させてくれるといいのだけれど……」

「さいですか」

最近、あんまり良い戦いを出来ていないらしいカミツレは、どうやらバトルそのものに飢えているらしかった。その雰囲気、さながら戦闘狂そのものである。なにそれこわい。

飢えがあまりにも強すぎると、最悪僕にまで矛先がむいてくることもあるので、今回の電話の主には多大なる感謝を、そして、挑戦者のお二人さんには哀れみをプレゼントだ。勿論、心の中で。

家から出ていったカミツレを見送り、自分が飲んだ分と一緒にカミツレが残していったカップごと食洗機に突っ込み、玄関先のハンガーに掛けてあるジャケットを着込む。この地方は暑くもなければ寒くもない、結構快適な気候であることが多い。なので、好きにファッションを決め放題だ。かと言って、どこぞの誰かさんのように露出過多なものはいかなものかと内心思いながらも、靴箱の上に無造作においてあるバイクと家のとがくつついたキーを掴み、外へ出た。

外は目もくらむほどの日光が差し掛かり、いい感じにお出かけ日曜日だ。——よし、今日はいいことがありそうな気がする。期待して待ってしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1404ba/>

旅に出たい男の日常

2012年1月3日15時47分発行